

---

# 俺と手紙と昔の話

特命希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

俺と手紙と昔の話

### 【Nコード】

N0565Y

### 【作者名】

特命希望

### 【あらすじ】

俺がソレを見つけるに至った経緯と、ソレにまつわる当時の話。似非歴史空想小説。コレ、重要。

【注意】この物語はフィクションです。ファンタジーです。実際の史実、国家、人物、事件等とは？一切？関係ありません。モデルにした国はありますが、あくまでも？モデル？であって史実ではありません！

モデルにされた当時の歴史的背景とか生活とか、詳しく調べてい

ないので妙な点が多々あるかと思いますが、その辺りも寛大な心で勘弁してくれると嬉しいです。余りにも酷い時は教えてくれると歓迎します。

俺の話・俺の立場と始まりのこと（前書き）

重要なのでもう一度。

【注意】この物語はフィクションです。ファンタジーです。実際の史実、国家、人物、事件等とは？一・切？関係ありません。モデルにした国はありますが、あくまでも？モデル？であって史実ではありません！

## 俺の話：俺の立場と始まりのこと

事情を説明すると長つたらしい上に鬱屈とするから割愛するが、俺は今、母方の田舎であるド田舎にいる。最寄駅まで車で一時間、バスで行く便は一日五本、因みにそのバス停までは歩いて三〇分とまあ、これまでの暮らしから考えれば不便極まりない場所ではない。

祖父母は少しでも俺が不便を感じないようにと、俺を迎え入れるにあたって居室となる部屋をフローリングにし、光回線を引き、水周りを新しくしてくれた。もっとも、水周りが高齢となった祖父母が不便しないように母親らがバリアフリー仕様にする意味もあったようだが。

とにかく、そんな至れり尽くせりで、俺は祖父母の元に身を寄せることになったのである。

日中俺が何をしているかといえば、特に何をしているということはない。早朝や夕方は祖父母の畑を手伝ってはいるが手伝いの域を出るものではないし、他に仕事をしているわけではない。縁側に座り、呆けと外を眺めているのが日課といえば日課だった。

そんな俺を見かねた祖母が、蔵の中を見て回ってはどつだと言ったのはそう時間が経ってからではなかった。

祖父母の家は長く続く家で、数百年を超える血を繋いできた。そんな家であるから敷地には立派な蔵があり、その中には使っていない古道具から骨董のようなものであるのだといった。

俺はそれらにまったく興味をもてなかったから一度は拒否したのだが、気が向いたらでいいから掃除とリスト化をしてくれればと言われては、更に断ることは出来なかった。

翌日から、昼の暑さから逃れるように蔵の中に籠った。薄暗くひんやりとした蔵の中は存外に心地よく、掃除は思いの外はかどった。溜まった埃を払い、木箱を開け、中身と蓋の裏書きをデジカメに記録する。後でパソコンでまとめ、プリントアウトすればいい。こういった作業は嫌いじゃない。

茶碗や根付などの小物類を終え、次はどの辺りをやるうかと蔵の中を見回したとき　大きな箱に気が付いた。つづらや段ボールの類ではない、木製で隅には金具がついた頑丈なそれ。

なぜか興味が沸いた俺は、次はその箱の中身を確認することに決めた。

中から出てきたのは、巻物と和綴じにされた本だった。虫除けのためのものだろう薬草の匂いの染み付いたそれらは、取り分けて古いというものではなかった。

手始めに一番装丁の見事な巻物を開く。家系図だったらしく、俺の知らない名前がいくつも連なっていた。一番最後までみても俺の知る名前はなかった。

次いで和綴じ本を適当に開いた。  
年号、月、日。それらで終わる文章がいくつもある。それらは筆で書かれている上に達筆なため、何が書かれているのかはひと目で理解出来なかった。けれどどうやら手紙を纏めたものらしいことは理解できた。

先日の手紙で調子を崩されたと書かれていたので、心配しています。この手紙が届く頃には快癒していることを願います。

そちらは秋めいている頃でしょうか、こちらでは既に秋の訪れを感じています。田畑では稲や野菜が実をつけ、例年のない豊穰だと村の人たちは喜んでいます。こういったところはどこの国でも同じなのだと実感します。

備蓄については、前に手紙で助言くれた通りになりそうです。色々な問題もそうだけど、倉庫の建設が間に合わなかったのが一番の原因です。冬の寒さに耐える造りのもとなると、やはり早々には厳しいものがあったので。それに備蓄庫より住居を優先しなければいけなかったし。そうそう

比較的簡単そうなところを読んでも、手紙で間違いなさそうだった。けどもその文脈に違和感を覚えて、幾度と読み返してしまった。

どこの国でも、とはどういう意味なのだろう。

昔は地方を国と呼んだらしいが、年号は『正和』しょうわで廃藩置県が行われた後であるからその可能性は低いだろうし。この時代であれば海外旅行も行われていたはずだが、そんな人物から手紙が届くような人物が俺の血縁にいたとも考え難い。大地主といえど、所詮は田舎者なのだし。

それに、旅行といった感じではない。

気にはなったが俺はそれ以上考えるのをやめ、この箱の中身は後回しにしようと思いに戻した。

それが何なのか、答えは直ぐにわかった。その日の夕食時、蔵の中に気になったものはなかったかと祖父が聞いてきたのだ。

俺でも名前を知る焼き物を幾つかあげたあと、あの箱の中身をあげた。

すると祖父はあっさり答えをくれたのだ。

あれは祖父の叔母が夫に貰った手紙を纏めたものだ。

祖父の叔母 尊和子<sup>とわい</sup>さんは、その時代の女性には珍しく学のある人であったという。それは祖父の祖父が 高祖父<sup>たかひい</sup>がこれからは女性も学が必要だと考える先進的な考えを持った人であったことと、曾祖父が身体の丈夫な人でなかったためにもしもの時は尊和子さんが婿を貰って家を継ぐと考えていたからではないかと祖父は言った。そんな高祖父であったから、村の子らを男女問わず集めて学問所のようなものを開いたり、見込みのある子には上京する援助もしていたという。

そんな高祖父の趣味は書物を集めることで、地主仕事の傍ら小銭を稼ぎ本を揃えていたとか。そうやって集めた書物の中には結構珍しいものも多く、当時は方々からその書物を目当てに人が訪れたという。

その中で意気投合したひとりが尊和子さんを気に入り、自分が目をかけていた者の嫁にと望み、縁談が決まったという。それが手紙の送り主。

籍を入れ一緒に暮らし始めそろそろ子が欲しいねという頃合いに、尊和子さんの夫は外国に赴任することが決まった。約一〇〇年前の出来事である杜藍<sup>とらん</sup>併合がその原因で、時の八杜<sup>やじと</sup>政権の役人であったその夫は併合された朝藍<sup>あそらん</sup>国に行くことになったそうだ。

高官のひとりが朝藍国は文明なき国と併合に反対していたこともあって、子がいないのならと離縁の話もあったそうだが、尊和子さんは無事に戻ってくるのを待つと決めたのだそうだ。

その赴任中に送られてきた手紙をまとめたものが、箱の中に納められていた数冊にもなる本であったということだ。

なぜだか、その手紙の内容が気になった。

今と違って連絡なんて簡単にやりとりできなかつただらうのに、

今みたいに飛行機で三時間と掛からず行くことが違うのと訳が違う。  
そんな場所に、妻を残して行く人の気持ち。

読んでも構わないかな？

自然ともれたその質問に、祖父は笑顔で頷いてくれた。

## 手紙と昔の話：朝藍国での始まりのこと（1）

お元気ですか？ 私は尊和子さんの持たせてくれた胃薬のお陰で、慣れない食事で胃もたれすることなく、無事に赴任地に来ることが出来ました。尊和子さんのような素晴らしい妻がいて、私はとても幸せ者です。

私が赴任することになったのは首都から離れたところにある農村で、どちらかといえば牧歌的な雰囲気漂う場所です。一緒に赴任したのは私を含め四人と少なく、驚くことに、私が一番役職が上だと責任者を押し付けられてしまいました。不安です。とはいえ、私の上には一帯を纏める方がいらっしやるのですが。

心配されていたように八杜やっこに比べると色々と遅れているみたいですが、精一杯頑張っつていこうと思っています。それでひとつお願いなのですが

### 『手紙と昔の話：朝藍国での始まりのこと』

その農村を見て、私たちが言葉を失ったのは仕方のないことだったのでしょうか。

村の中央を通る道は人や家畜が踏み固めただけの幅の狭いもので、並ぶ建物はとても人が住んでいるとは思えない掘建て小屋がいいとこで、見える田畑に育つ作物は人が手をかけていることを疑うほど痩せていたのです。衝撃的だったのはそれだけでなく、開けた場所に所在無さ気に立つ彼らが襷褌を纏い、生気のない目でこちらを見ていたことでしょうか。

首都も酷い有様でしたが、ここはそれ以上でした。

「これはどういうことだ？ 俺たちは大きな農村に連れてこられると聞いていたぞ」

未だ言葉が出ない私に代わりそう案内の朝藍あさいの役人に問い質したのは、軍部から出向の桜井。私たちの護衛も兼ねている彼は、がっしりとした身体つきをした強面の人物でした。

桜井の鋭い視線に射られ役人は短い悲鳴を上げると、震えた声で必死に答えてくれました。「この村はわが国では大きく豊かなほうなのです」と。

「冗談を言うでない、ここはどこを見ればそう言えるのだ。」

八杜ではこのような？ 農村？ などありはせんぞ。廃村に人をそれも浮浪の者を集め我らを誤魔化そうなど、その首が飛んで当然のことだ」

「落ち着いてください、早瀬さま。きっと何か事情があるのでしよう」

桜井とは対照的な細面な冷たい風貌の本庁の早瀬さまが護身のために携帯している短銃に手を伸ばしたのに気付いて、私は慌てて間に入った。

本来ならご実家が爵位持ちであるという早瀬さまがその役職とお立場から責任者になるべきだと私は考え伝えたのだけでも、それは上役と早瀬さまに却下されてしまった。早瀬さまは真っ直ぐな気性の方なので役職が上の私を立てるといふ言葉に嘘はないのでしょうか、上役の方々には問題が起こった場合責任を早瀬さまが取らなくて済むようにという思惑があるのは確かでしょう。

少々気の短い早瀬さまを責任者に据えるには不安な点があったのは確かでしょうが。

私は笑顔であるように努め、地面に平伏す役人の前にしゃがんで訊ねました。なぜここに案内したのかを。

「八杜のお役人さま、この村に案内したのは他意があつてのことではないのです。

わが国はどこも土が痩せており、満足に米や麦を育てることが叶わないのです。チュウイより買いいれ、なんとか凌いでいる状況なのです。それとて満足な量ではなく、農村は命を繋ぐのがやっとなのです」

情報として聞き知っていたことと返ってきた内容はほぼ同じで、どうやら嘘ではないと私は感じました。念のため、首都にいる上司に確認をとらねばなりません。

「おい、その役人はなんと言つたのだ？ 早口でうまく聞き取れなかった」

桜井は眉間に皺をよせ、威圧を振りまきながら八杜の言葉で尋ねてきました。

朝藍は八杜と言葉が違います。古くはどちらもチュウイの言葉を主として使っていたのですが、長い時の間に言語はそれぞれチュウイとは別の言葉となつたのです。

早瀬さまは何の問題もなく、私は日常のそれであれば会話に困るものではなく、桜井は片言でゆっくりであれば理解出来て話せるといった程度です。朝藍の役人のそれは首都の人が話すものよりも訛りが強く、更には早口だったために理解出来なかつたのでしょうか。私が八杜の言葉で告げると、桜井は難しい表情を浮かべました。

「なるほどな。そういうことなら土地改良から始めねばならんな」

家が田舎の大工だったという桜井は私たちの誰よりもこの地に適しているといえるのでしよう。机上の知識を無理矢理詰め込んだ私と違い。

どこか生き生きしているような気がしますし。

「早瀬さま、ここは私と倉間ぐらまに任せこの村を信濃井しなのいと共にひと回りしてきてはくさいませんか？

そして村のおおまかな地図を作って欲しいのです」

「わたしを邪魔者扱いするのか」

「いえいえ、そんなつもりは毛頭ごとうございませんよ。適材適所です。

何をするにもまずは村の地形を理解するところから始めねばなりませんからね」

その言葉に早瀬さまは軽く鼻を鳴らして朝藍の役人を顎で呼びつけると、信濃井さんを供につれ歩いていかれました。朝藍の役人に説明をさせながら。

「では倉間、俺たちはこの村の住人の把握といこう。

氏名、性別、年齢。それらを家ごとにまとめて と、これはお

前のほうが詳しいな。お前に一任して構わないか？」

「ええ、八杜で戸籍管理の部署にいたことがあるので任せてください。

何か知っておきたいことはありませんか？」

「そうだなあ……何か技術があるかを聞いてくれ。この掘建て小屋を人が住めるものにせねばならん」

「わかりました」

私は桜井の言葉に頷くと、荷から書き留める紙と筆記用具を取り出して彼らに視線を向けました。

桜井や早瀬さまの怒声に驚いたのでしょう。怯えたようにこちらを窺い見る彼らに笑みを向け、彼らの中でも年嵩な 真っ白な頭髪の老婆に視線を向けました。

努めて丁寧な言葉になるよう、気を使いながら口を開きました。

「貴女から、姓名、年齢、それから生まれた地と始祖の地をお願いできますか？」

この国には姓というものがありますが、その殆どが十程の姓に収まってしまふのだそうです。その上生まれ年に因んだ文字をつけるのも一般的で、縁起の良い文字を使うと同姓同名は珍しくないのだそうです。それでも同じ村では同じ名はつけられないようにするのだそうです。村の外に働きに出たり嫁いだりすると同じ姓名の者が居る事は少なくないといっています。

そのために生まれた地と始祖 血族の祖で、初めにその姓を名乗ったものの地を共に名乗るのが一般的なのだ聞いています。ですので、それに倣い訊ねました。

老婆は孫息子らしい少年に付き添われ集団の中から杖をつき歩み出ると、私から視線を逸らさないまま口を開きました。

「コ・トンファ、歳は数えるのはどうの昔に止めたのでわからん。

生まれは半日ほど行った先にあるドトの村だね、始祖の地はアデリヤネ」

「ありがとうございます、トンファさん」

「恥ずかしいね、誰もあたしのことを？さん？などつけて呼びはせんよ。」

ぬしらも村の者らと同じように婆と呼ぶといいわ」

ありがとうございます。と告げ、聞いたことを紙に書き付けなが

ら、思った以上に会話が成り立っていることにほっとしました。

案内についできた役人はこの農村からさして遠くない町の出だと言っていました。役人として首都で働くうちに訛りは改善されたと言っていました。それでも早口で話されると分からないことがあるほどです。

だというのにこのトンファという老女は、訛りの少ない、首都で聞いたような朝藍語を話したのです。

もしかしたらという、様々なことが脳裏に浮びましたがそれは私の中に押し留めることにしました。

この国では女性の地位は八杜よりも遥かに悪いのです。人身売買よろしく、いまでもその身がやりとりされているのだと聞きました。

「ではトンファ婆、貴女は幾人子を産みましたか？ その子を産んだ順に、名前と性別をお願いします」

女性の中には欲しくても子が授からない人がいることは承知でしたので、私はトンファ婆に近付くと村人たちには聞き取れない程度の声で問います。

「ふん、あたしに気を使う必要はないよ。

子は全部で八人産んだね。男が三人、女が五人。男は全部幼いうちに死んじまつたし、女は物心つく前には口減らしにどっかにやっちまつたさ。

その子らがあたしがつけた名を覚えてるとは思えんが、一応聞かかね。八杜のおひと」

「ええ、出来れば」

私が戸籍を作ろうとしている事をトンファ婆は正確に理解していて、聞かずとも欲しい言葉を喋ってくれました。順に言う名を書き

つけたそこで、トンファ婆は声を潜めて言いました。

「あたしは死を待つだけの身さ。あまり過去を詮索せんでおくれ」  
「……わかりました。私たちの仕事にかかわらないなら、詮索しないと約束します」

「まあ、それでいいさ。」

あたしはこの村で薬師と産婆の真似をしてる。願い事をひとつ聞いてくれるなら、ぬしらの仕事を手伝ってやるが、どうだね？」

「それも私たちの仕事に差し障りがないのであれば」

決まりだね。トンファ婆はそういうと村人たちを向いてその場に座り込んでしまいました。

「ルチユ、お次はあんたの番だ」

呼ばれ前に出たのは、私の親ほどの歳の女性でした。

トンファ婆にしたものと同じ問いをその女性にし、そして彼女の子を孫を と、トンファ婆の助けがあつて思った以上に早く戸籍を作る作業は進んだのでした。

手紙と昔の話・朝敵国での始まりのこと(2) (前書き)

R15的内容(倫理に反するもの)があります。

## 手紙と昔の話：朝藍国での始まりのこと（2）

日が傾き始めた頃戸籍を作る作業は一通り終わり、私と桜井がトンファ婆とその弟子 テミヨンと連れ立って、私たちに与えられた家に向かいました。

当然のようにそれは家というのも残念なそれではしなく、それでも村の中では立派な部類に入るものでした。

「これでは満足に眠れやしないな。

早瀬さまと相談しなければならぬが、可能な限り早く家を改善する必要があるな」

？家？を見あげ立ち尽くし、思わずと言った風でそう漏らした桜井の言葉には私も同感でした。衣食住は人が住む上では非常に大切ですから。

そんな私たちにトンファ婆は笑うと、とりあえず中に入れと私たちを促しました。

「遅いじゃないか。倉間、桜井。

この掘っ立て小屋では雨風すら凌げるか怪しいからな、独断で馬小屋として使うことにさせてもらった。わたしたちは当分は馬車の荷台で寝るぞ」

私たちを出迎えたのは半分が土間になった室内で、満足そうに馬を撫でながら言う早瀬さまでした。

掘っ立て小屋を見たとき以上に啞然とした私たちを後ろからトンファ婆が杖で殴って退かすと、飼葉を食べる二頭の馬と早瀬さまを見て私たち同様に言葉を失った後、けたけたと声をあげて笑ったのです。

「そこのおひとは随分と大胆なことをするねえ。  
あたしはこの村で薬師と産婆の真似をするトンファというものさ。  
まあ、今は夏の始まりだ。凍え死ぬこともないし、好きにすると  
いいわ」

トンファ婆は一段高くなった場所に腰をつけると、ぐるりと辺り  
を見回した後、テミヨンに視線をやった。

テミヨンは深く頭を下げると、口を開いた。

「テミヨンと申します、八杜やっぺのお方」

その声は小鳥が囀るようなとあらわすべきか、それとも鈴を転が  
したようなとすべきか。とにかく最上の調べと表現するような、  
少女の声だった。

「これはあたしが取り上げた子でね、母親のイアンファはこれが物  
心つく前に亡くなった。

イアンファはこんな村だというのに美しい娘でね、生娘のまま高  
く売るんだと村の男共に母親のスミミは意地でも近づけさせなかつ  
た。

それがあだになったんだらうねえ、秘花と有名になったイアンフ  
アはならず者に浚われたのさ。一年後くらいに森の中に棄てられて  
いるのを見つけたのはあたしでね、腹の中には産み月間近なこれが  
いて、取り上げて看取ったってわけさ」

天気の話でもするような軽い調子で告げられたその内容は反比例  
するように重々しく、私が思わず眉を顰しかめてしまったのは仕方な  
いことではないでしょうか。

そんな私に気付いたのかトンファ婆は早瀬さまを見た時のように

けたけたとひとしきり笑ったあと、再び口を開きました。

「確かにイアンファにとっては辛い出来事で、テミヨンにとっても誇れない自分の素性さ。しかしね、八杜のおひと。この国じゃ望まぬ男との間に子を成すのは珍しいことじゃない。愚かな男共は女は力尽くでものにするものだと思ってるのさ。」

それだけじゃない、女親は産んだ子が女兒であれば幾らの値がつくか勘定する。男親はある程度の歳になれば下の具合はどうかと己のもので確かめようとす。男兄弟も同様さ。血縁じゃない場合はもつと酷い、年頃の娘を集団で犯し十月十日後に産まれる子が誰の子であるか賭けるのさ。

これが朝藍という国なのさ。獣にすら劣る民族の国さね」

「この国には倫理というものはないのか！

ドウナ教が主なる教義だと聞いてきたが、ドウナ教が掲げる人々の尊厳など欠片も存在しないじゃないか！」

思わず八杜の言葉で声を荒あげた早瀬さまを宥め落ち着かせると、トンファ婆に向き直りました。

「私たちに頼みというのは、テミヨンに関することですね？ 彼女を保護してほしい、そういうことなのでしょう？」

「そこまで無理は言わんさ、この子が女であることを黙っていてくれさえすればいい。」

十五歳になれば大人として認められる。それまで構わないんだ、十五歳になったならこの子はこの村を出る。

迷惑はかけんよ」

「正等な理由がなければ戸籍の内容を公開することはしません。悟られるような真似をしないのであれば、誰も私たちに聞いてくることをしないでしよう」

私個人としてはトンファ婆もテミヨンも守れたらいいと思っ  
まうのですが、役人という立場では形通りの答えしか返すことが出  
来ませんでした。だというのにトンファ婆は、感謝すると言ってテ  
ミヨンと共に頭を下げたのです。

「話はわかった。わたしも尽力すると誓おう。」

先ほどのこの国の役人と村を見て回った際、見慣れぬ植物があつた  
ゆえ名と特徴を訊ねたら知らんと返ってきた。あの男は全く使えん  
植物だけに限らず、文化や生活などをもわたしには書き留める仕  
事がある。それを口実とすれば、傍にそなたらを置いておくことも  
出来るだろう」

言いながら、早瀬さまは名案だと思つたのでしよう。その表情は  
先ほどの激昂したそれではなく、満足げなものでした。

私と桜井の主たる役目は、農村の暮らしぶりを見てそれをいかに  
改善するかという指標を作るといふものです。八杜政府の上の方た  
ちは、八杜を含めた東アルア地区をひとつの集合体と考え欧米諸国  
と渡り合おうと考えているのだそうです。先のチュウイとの戦争に  
勝利した際に、属国であつた朝藍の権利を要求したのにもそういう  
意図があるのだといひます。

難しいことはわかりませんが、そのため桜井は私たちの護衛では  
ありませんが田舎の大工の出で、農作業にも大工仕事にも最低限の知  
識を持ち合わせているのです。

「桜井、そのように動いてもらつて構わぬか？」

「了解しました、桜井さま」

「よろしく頼むぞ。」

さて、倉間。この村をいかに良くするか、その策を練ろうではな  
いか。信濃井、地図をこちらに「

私などよりも指揮者に向いている早瀬さまがそう音頭をとり、ずっと無言で刀を抱え壁に寄りかかっていた信濃井に地図を広げさせました。

即席であるはずの地図ですが、想像以上に細かいところまで書き込まれていて驚きました。

「素晴らしい出来ですね」

「早瀬さまにお願いして間違いありませんでしたね」

私と桜井が口々に感嘆の言葉を漏らすと、早瀬さまは書いたのは信濃井だと告げました。

手柄を無理に己のものにしようとしないうところは、私の以前の上司に見習ってもらいたいです。

「八杜のお役人さま、水を、汲んで参りましたっ」

一抱え近くある樽を抱えた男が中に入ってきて、そういえば朝藍の役人の姿が見えなかったことを思い出しました。

都合よく姿が見えないと思ったら、早瀬さまに水汲みを頼まれていたとは。

人が住むのですから飲める水があるのでしょうか、八杜のように水の豊富な国は珍しいと聞きます。大陸には国の殆どが砂で覆われた土地であり、水が金と同等の値で取り引きされる国もあると思います。

「うむ、ご苦労。」

……ああ、そうだ。この村のことはこの村の住人に聞くことにした。故にそなたは用なしだ。好きにするといい」

肩で息をする朝藍の役人を早瀬さまは軽くあしらうと、広げた地

図に視線を落とした。

少々哀れとも思いましたが、早瀬さまが？浮浪の者？と称すほどの村人が住む村ですので、やらなければならぬことが次から次へと浮んでくるのです。

「早瀬さま、まずは即食物となれる芋の生産から始めたいと思うのですが。幸い、持ってきた荷の中には芋の蔦がありますし」

「それには俺も賛成です。俺と倉間は戸籍をつくるのにひとりひとり見たから断言できるが、あれじゃあまともに畑仕事も出来ませぬね。」

山から家の材料と出来る木を切り出してと考えていたのですが、先に延ばすか首都から人手を借りてこなければ厳しいでしょう。

それからここに来る途中にみた畑はどれも土地が痩せていて

口火を私が切ったその話し合いは、トンファ婆が加わり更に白熱し、日が暮れてもなお続いたのです。

## 俺の話：目標と逃避のこと

読んでいる内に眠ってしまったらしく、気がついた時には腹の上には布団がかげられ本は紙が挿まれたり組まれたりして部屋の隅に纏められていた。

祖母だろう。

携帯を開いて時間を確認すれば、おやつ時を過ぎていた。一緒にお茶を飲むのが日課になっていた俺がこなかったから心配して身に来たのだろう。

それにしても、妙な夢をみた気がした。

どんな夢だったのかは覚えていないが、手紙の内容と係わり合いのあるものだった気がする。

手紙には差し障りのない内容しか書かれていない。それでもぼつぼつと意味の理解出来ない単語や文章が出てくる。

それを理解したくて、一緒に持ってきた歴史の教科書やウェブ上で閲覧できる資料などを書き出しながら、読み込んでしまった。それが原因だろうとは思っ。

ただひたすらに勉強に没頭出来ていた頃を思い出してしまった。

あの頃の俺は、知ることがただ楽しくて、教科書や参考書で疑問に思ったことがあれば専門書を開いてまで理解しようとしていた。

改めて思えば、逃避だったのだろうとは思っ。

俺を取り巻く環境を直視しなくなくて、俺の学校の成績さえ良ければ俺の周りは平穩だった。

手紙の中は、相手を思いやる言葉で溢れていた。

文中では必ず身体を慈愛するように促す言葉が出て、返事で帰ってきたやはり慈愛を促す言葉にお礼を言っていた。

間違いなく俺の周囲にはなかった思いだ。

メールの新着を告げるアイコンに、受信フォルダを開いて送り主を確認して 開かずに電話を綴じた。ついでに電源を落とした。視界に入らない場所に放って、頭から布団を被る。

こんな気分になるなら、何も考えずに何もせずに過ごしていればよかった。そう考えてしまった自分が嫌になる。

自分でもからっぽの人形のようなだと思ってしまう俺に祖父母が心を痛めていて、蔵で見つけたものの話をすると嬉しそうにする祖母の気持ち、無碍に出来る自分が。

どれだけそうしていただろう。

途中で電話の音がした気がしたが、気のせいだったに違いない。

俺の携帯電話は電源を落としてある。

布団から顔を出すと辺りは薄暗く、祖母が作っていると思われる夕飯の匂いが風に乗って漂ってきた。

そのままの格好で部屋の隅まで移動すると、適当に手紙の本をとる。

そして目についたページに視線を落とす。薄暗くなっているが、文字が読めないわけでもないから、そのまま。

実物を見たわけじゃないからどのようなものが届けられたかわからないですが、尊和子<sup>とわこ</sup>さんの気に入る品であるといいと思っています。欧州のほうでは、その子が一生飢えることがないようにお食い始めでは銀の匙を用いるのだそうです。手紙が届く頃には離乳が始まる時期になっていると思うので、実家の風習もあるので無理にはいいませんが、私からの思いと違って受け取ってください。写真は確かに受け取りました。前の時のものよりも、随分と顔つきがすっかりしてきたように思えますね。目許は尊和子<sup>とわこ</sup>さん似でしょうか？ 話しかけると目を瞬かせる癖が私と同じと書かれています、意志の強そうなところは

手紙の中は、やはり優しい想いで溢れていた。私から妻の尊和子<sup>とわこ</sup>さんへの思いでも、生まれた子どもへの想いでも。今はその優しい思いに、少しでも触れていたかった。後で自分の環境と比べて悲嘆にくれるかもしれないが、それでもいいと思った。

読んでいたそれを探し出して、俺は再び読み解く作業に没頭した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0565y/>

---

俺と手紙と昔の話

2011年11月12日11時38分発行